

4 水を治める—川を治める意識—

水やそれを集める川は人間にとって、どうしても必要なものでしたが、一方で水害など人間にとっての災いも引き起こしました。こうした災害には人間として対処しなくてはなりません。ところが、川が神仏とつながる特別なものであったとするならば、治水は特別な行為であったはずです。

そこで次に、治水の意義について考えてみましょう。

【中国の皇帝像】

日本人の思想に大きな影響を与えたのが中国思想です。ですから中国の伝説上の治水から確認しましょう。

中国の洪水神話は雲南省を中心に存在しています。それによれば、伏羲^{ふくぎ}と女媧^{じょか}の父が雷公と戦ったのですが、雷公が洪水を起こして攻めたため、二人を残して人類が滅亡してしまいました。兄妹は結婚して人類を伝えたといいます。

中国治水の出発点に位置づけられるのは、洪水伝説に関わる風姓の伏羲（ふっき・ふくぎ^{ほうぎ}。庖犧）です。彼は古代中国神話に登場する神または伝説上の帝王で、三皇五帝の出発点になる人で、中国最古の君主とされています。字義は「瓢簞^{ひょうたん}」です。瓢簞は水を入れる容器のシンボルでもあります。

『史記』によれば、伏羲は蛇身人首で、聖徳がありました。仰いでは天象を観察し、俯しては地法を観察し、あまねく鳥獣の模様と地の形勢を見極め、近くは自身を参考にし、遠くは万物を参照して、八卦を画し、神明の徳に通じ、万物をその本質に適合して治めまし

た。はじめて婚姻の制度をたて、一対の皮を互いに交換する習わしを定めました。網を結んで、漁法を民に教えることもしました。こうして民は皆彼に帰伏したので、伏羲氏というのです。牛・羊・豚などを家畜として養い、それを厨で料理して、犠牲^{ぎせい}として神祖や祖霊を祀りました。それ故に庖犧とも言います。竜の瑞祥（竜馬が図を背負って川から出たというめでたいしるし）があったので、官名に竜という字をつけ、その軍隊を竜師^{りゅうし}といいました。35 弦の瑟^{しつ}をつくりました。女媧氏^{じょか}も風姓でした。蛇身人首で、神聖の徳があり、伏羲に変わって王座につきました（『中国古典文学大系 10 史記上』5 頁、平凡社、1968 年）。一般に伏羲は天を、女媧は地を治めたとされます。

雨水は天から降ります。洪水の原因も天からの雨ですから、天を治めた伏羲はその対応者といえるでしょう。また、蛇身というのも、水と蛇（竜）とのつながりを想起させます。さらに姓が風であったことも注目に値します。

人類の文化を創造したともいえる人間の、最も重要な役割が治水だったのです。

次に古代中国の伝説的な帝王として、夏王朝の創始者として有名な禹^うがいます。彼は紀元前 2070 年頃の人です。名は文命^{ぶんめい}、大禹、夏禹、戎禹ともいい、姓は姒^し、夏王朝創始後に氏を夏后としました。

帝堯^{ぎょう}の時、洪水が天まではびこり、こうこうとして山をつつみ陵^{おか}にのぼったので、人民ははなはだしく憂慮しました。堯が水を治めることのできる人物を求めたので、群臣^{こん}などが鯀^{こん}を推挙しました。彼に治水にあたらせましたが、9 年経っても洪水はやまず、堯はさらに人物を求めて舜^{しゆん}を得ました。舜は鯀の子の禹に父の事業を継続

させました。禹は帝の命を奉じて、諸侯・百官に命じて人夫を徴集し、それを全土に配置して水土を治め、山々をめぐり、木柱を立てて山名を表記し、高山・大川の格式を定めました。九州を開拓し、全土にわたって道路を通じ、沢に堤防を施し、山を調査しました。益に命じて民衆に低湿地に植えるべき稻を与え、^{こうしよく}后稷代に命じて民衆に得難い食糧を与え、食糧が不足しているところへは余りあるところから補給させて、諸国の事情を均しくしました。彼の活動によって九州は均しくおさまりました。四方の川岸は落ち着いて、人々の居住するところとなり、九山の木々は切り払われて道路が通じ、山の祭りも行われるようになり、九川はさらわれてほどよく流れるようになり、九沢は堤防を築かれて^{はんらん}氾濫の恐れがなくなり、四海の民は都に集まるようになりました。帝舜は禹を天に推薦して後嗣にしました（『中国古典文学大系 10 史記上』18 頁以下）。

中国の皇帝のマークを知っていますか。衣服や建物など、皇帝には必ず竜のマークがついています。これに対して皇后は^{ほうおう}鳳凰です。竜は水のシンボルですから、そこには水を制する意義が込められています。つまり、古代中国において理想の皇帝は治水のできる人だったのです。自然に闘いを挑み、人間の安全のために治水事業を成し遂げることができる人、それこそが皇帝の条件でした。一方、皇后の鳳凰は風のシンボルです。皇后の方は風を治めることが期待されたのでしょう。もしそうなら、諏訪信仰の雨（水）と風に直結してきます。人間にとって、雨と風を制することは永遠の理想であり、統治者の役割と認識されていたのです。

【日本の治水意識】

それでは、日本において治水はどのように考えられていたのでしょうか。それを知る手がかりが弘法大師こうぼうだいしの伝説の中にあります。

『日本伝説名彙』（日本放送出版協会、1950 年）による弘法大師伝説の類型を見ますと、次のようになります。

- 1 弘法大師が巡じゅんしゃく錫の際、水がなくて困っているところで、杖で地を突いて教え、また自ら掘ったという井戸である。
—具体的に 17 の伝説出典
- 2 水を所望して、水の不自由しやくじょうなるを知り、錫杖で突いたという。 —4 の伝説出典
- 3 独とっこ鉆を以て地を突いたというもの。 —6 の伝説出典
- 4 弘法大師に差し出した水が、あまり水色がよくないので、よい水を出してやる。 —3 の伝説出典
- 5 大師が老婆に乞うと水がないため一度断ったが、大切な水一碗を与えると、大師は杖を地に立てて水を出した。 —2 の伝説出典
- 6 弘法大師が機はたを織る女に水を乞うと、女は遠方から汲んできて飲ませる。大師はそのお礼に杖で突いて清水の出る場所を知らせる。 —14 の伝説出典
- 7 弘法大師に水を与えたところには杖で突いて水を出し、与えなかったところには水がなく、また渴水かつすいとなる。いわゆる隣の爺型形式である。 —5 の伝説出典
- 8 水が生ぬるいとか濁っているとかいって与えなかったため、渴水となり、また遠方に出て不便となる。 —5 の伝説出典

- 9 機を織り、あるいは洗濯して、口実を設けて与えなかったため、水が減じ、またはなくなる。 —11 の伝説出典
- 10 米のとぎ水、洗濯水、白水などを与えたため、水が濁り、また白くなったという。 —4 の伝説出典

ここで注目すべきは伝説の弘法大師が、各地に弘法水伝説を残していることです。こうした伝説からすると、弘法大師は基本的に宗教上の特別な人であり、水を統御^{とうぎよ}できる能力を有していたことになります。見方を変えますと、弘法大師は既に述べてきたような、聖なる性質を持つ水を湧き出させたり、止めたりすることができるわけで、自然をコントロールできる点に特質があるのです。

中世において、水を制することができる人は、弘法大師に代表される聖なる人だったのです。さらにいいますと、そのような人は宗教者に代表され、神仏と人間の間にいる人で、人間の意図を神仏に伝え、働きかける能力があると意識されていたのです。



牛伏寺の弘法大師像（松本市）

【人柱をめぐる】

治水は自然に働きかける行為です。日本においてこのことと密接な関係を持つものに、人柱の伝説があります。そこで少し視点を変えて、人柱の伝説から治水の問題を考えてみたいと思います。

各地に残る人柱の伝説を類型化してみますと、次のようになります（笹本正治『中世の世界から近世の世界へ』、岩田書院、1993年）。

【一 堤防の人柱】

- 1 川の堤防
- 2 井堰の堤防
- 3 池・沼の堤防
- 4 海の堤防・防波堤
- 5 不明

【二 新田開発と干拓の人柱】

【三 橋の人柱】

【四 築城の人柱】

伝説によりますと、人柱は川や池の堤防の建設、橋の建設、築城、新田開発などになされたようです。これらの工事は自然のままの状況から改変し、災害を防ぎ、



人柱の伝説を持つ丸岡城（福井県）

人間が利用できる場へと変更するもので、一般に普請^{ふしん}といわれます。

伝説などからすると、人柱は人間に都合よく自然を制御するための奥の手のようにです。人間に都合よく自然を改変し

ようとして、取る術^{すべ}がなくなると人柱がなされ、それによって成功したというのが伝説です。なお、人柱の行なわれる場所は水辺が多く、災害の起こる場所であり、この世とあの世の接点だともいえるでしょう。

どうして人柱で、普請は成功するのでしょうか。私たちは夕暮れの道路で、道ばたに花などが手向けてあるとギョッとします。あるいはそこにお地蔵さんが安置されていたりすると、もっとゾッとします。そこで我々が想起するのは、ここが交通事故の現場であり、死者が出て、その霊が籠もっているとするものです。交通事故の場合、おそらく現場で死亡する人はごくわずかで、多くの方は病院で亡くなっているはずです。でも病院には花が手向けられず、お地蔵さんも安置されないのに、事故のあった場所にはこのようなことがなされるのです。おそらくこの背後には、事故現場に魂が宿ってい



人柱を祀る祠（福井県丸岡城）



水神様（飯山市）

るとの意識があるのではないのでしょうか。しかも、道路は公共のものでありますから、地蔵さんを置いたりすることは、個人の公的空間の占拠につながります。でも多くの人はこれを容認するのです。つまり、死の現場に人の魂が籠もり、そこを人の側で占拠しているとの理解です。この感覚からすると、人の魂を死をもって死亡現場に籠めてしまうことは、その場所に人間の魂が籠もり、人間が占拠することになります。人柱の意識はこの延長線上にあるのかもしれませんが。

ところで、洪水を含めた災害への対処は大きく二つあるように思います。一つは、神々などの怒りを買わない、神の怒りに対してはなだめようとする呪術的な手段です。日本各地の神社の存在や、祇園祭りをはじめとする祭りなどはこれにつながるでしょう。もう一つは、人間が土木工学的な技術で災害を防ごうとするものです。人柱の場合、後者を前提にして、神の場の占拠、あるいは神への慰謝ということにつながっています。

【武田信玄と信玄堤】

●政治の課題と手法

中国の場合、支配者が問題にされ、日本では宗教者として弘法大師を想起しましたが、双方をつなぐように日本における武田信玄のイメージを考えてみたいと思います。

ところで、皆さんは統治者に何を求めるのでしょうか。これは見方を変えますと、人間にとって何が大事かという問題に直結します。当然のことですが、自分の生命および財産ではないのでしょうか。学生たちに聞きますと、友人だとか、家族だとか、本だとか、なかなか素敵な答えが返ってきますが、こうしたものを享受するためには

まず自分の生命があり、財産が保持されていることが必要です。ですから、私としては政権に求める最低限の役割として、国民の生命と財産の保障をしてくれることを挙げます。

いかにすれば、それはなしえるでしょうか。これを考えるためには、どういう状況が生命と財産に危機をもたらすかを知ればいいでしょう。多くの条件があるでしょうが、まずは他国からの侵略をさせない。すなわち国民の安全を対外的に守る、その要素の一環として軍勢力が必要だと主張されます。その通りだとすると、沖縄戦の時のように、軍隊の身を守るために一般人を犠牲にすることは、とうてい許されないことです。まずはきちんと外交戦略によって、他国との戦争が起きないようにするのが、政府のつとめでしょう。

そこで問題になるのは、いかにしたら戦争をなくすことができるかです。戦争は本人の意志にかかわらず、生命や財産を危機に瀕します。平和な状況においておくことが統治者として最も重要な要件です。統治者としてはいかにして戦争をしないようにしていくかが、もっとも大事な政治なのです。

身近な面でいうなら、戦争の脅威よりも、暴力団や周囲の様々なトラブルに巻き込まれることの方が怖いかもしれません。これは戦争よりはるかに遭遇率そうぐうりつが高いと思うからです。ここに来て治安がきわめて悪化してまいりました。私の場合、金曜日夜遅くに松本駅に降りると、怖いと思う時があります。かつては全くそんなことを全く感じませんでした。明らかに治安は悪くなっているというのが、私の実感です。

小泉首相は、自分の身は自分で守れと、声高に叫びました。私たちが政府に求めているのは、自分個人の力ではどうにもならないか

ら、警察制度を整え、しっかりした裁判を行って、治安を維持して欲しいということです。自分の身を自分で守れとは、中世の自力救済の世界であり、敵討ちを当然とする社会と同じです。私たちは長い時間をかけて、自分の身を自分で守らなくてもいい社会を構築してきたのに、政府側は全く時代に逆行する流れを作ろうとしているようです。

もう一つ私たちの意図にかかわらず、生命および財産の危機をもたらすものは、災害です。ここに来て大きな災害がうち続いていますが、災害が無いようにするのが一番であり、その次に災害が起きた時、個人の力ではどうにもならない状況を社会で救って欲しいと思います。災害が起きないようにする一つの方策が治山治水です。国家や行政は災害をいかにして防ぎ、起きた時にいかにして国民を救うかが、大きな役割なのです。

人の生命を維持するためには、自給自足社会はほぼ不可能ですから、自分たちで生産できないものを安全かつ安定的に供給するようにならなければなりません。また、生命や財産の危機に際し、すぐにそれを救済してくれるような仕組みも必要です。このような時に大事なのは、道路網の整備であり、流通網の確保、物資流通量の保障ではないでしょうか。こうしたことは中国の伝説の皇帝禹がしたことです。

こうした点からするならば、求められる統治者像は、私たちが生命の不安を全く感じないようにしてくれる者です。財産の保障は当然のことながら、できたら財産を殖やしてくれる、モノとしての富を目に見える形で増殖させてくれるともっとありがたいですね。私たちは遠くを見ずに、目の前のえさにつり上げられることが多く、

利益誘導されると、それに乗りやすいものです。そして、そのような利益を与えてくれる政治家をいい政治家と勘違いしがちです。

目に見える利益でなくとも、人の心は浮き立ちます。地域住民の心をつにしてくれるような者に対しても、評価は高いようです。それこそ、精神的な豊かさ、心の高揚を保障してくれるものです。オリンピックやサッカーのワールドカップでは、日常的に日本人を意識しない人々も、日本の勝利に沸き立ちます。甲子園の高校野球では県代表の活躍に一喜一憂します。身近な生活を忘れ、精神的に高揚させてくれるような政権に、何となく弱いようです。

本来私たちにとってもっともわかりやすいのは、生活しやすい環境を整備してくれることです。治水もそのための方策の一つだといえます。

統治者はこうした私たちの意識を巧みに利用しながら政治を行います。その一つは、矛盾を国外に見つけ、国内の目を外側に向けさせることです。ちょっと状況が悪くなると、国内の情報をシャットアウトし、海外の脅威を主張する政治家が多いようです。また他所の国はこんなにひどいの、我が国は素晴らしいと宣伝します。対外関係となれば、遠くに視線が置かれますので、国民は一つになりやすいのです。

国内においても仮想の反対勢力を作り上げ、排除することが行われました。小泉政権の抵抗勢力と揶揄^{やゆ}したやり方です。これもまた、威勢がいいので、国民には何が何だかわからないけれども、単純にわかったような気持ちにさせられる手法です。

もう一つ政治家が得意にしているのは、国民に目先の利益を与えることです。税金を出しているのは我々なのに、政治家の金のように

にして配分し、地域を潤わせていると主張するのです。日本国全体、あるいは県全体のことは言わずに、地域にどれだけ利益を持ってくるかが、立派な政治家のように思わせることです。本来政治家は、遠い未来が少しでもよくなるように、未来に向けて活動すべきです。短絡的な地域利益の誘導の結果、日本全体を思いやる心が失われ、貧困な政治状況になったのだと思います。

政治家は自らの立場をよくし、国民の理解を得ようとして、宣伝、情報操作を止めどなく行っています。極言すると、マスコミ操作が今の政治家の評価につながっているのです。

こうしたことが一体になって、現在の政治は行われているのです。

●安全のために

もう一度、武田信玄に話を戻しましょう。



甲府駅前の武田信玄像

武田信玄の時代は甲斐国内に戦争がない時代でした。信玄の父信虎の時代は、甲斐国内統一戦の時代でしたから、頻繁に戦争が起きました。信虎の勢力が大きくなることは、そのままほかの地域領主の

勢力が弱まることでもありました。度重なる戦争で甲斐国民は生命や財産の危機に瀕したとして、彼の評判はとても悪いのです。しか

も当時は異常気象で、次々に災害が起き、食糧も不足していました。これは信虎の責任ではないのですが、飢えをしのぐ方策を示さなければ、統治者としては意味がないのです。こうしたことの責任もすべて信虎にかぶされました。逆にいうなら、良い政治家だったら天に心が通じ、気候異常もなくなるはずだという、願望のようなものがあるのかもしれませんが。

ところが信玄の時代になりますと、父親の代に国内統一がされていたので、信玄は戦場を他国に求めました。信濃をはじめとして、甲州勢は他国を侵略して利益を上げていたのです。信玄の時代 45 年間は他国への侵略戦争の時代でしたから、甲斐が戦場にならなくて済んだのです。しかも、信玄は連戦連勝でしたから、勝つ度に利益が甲斐に転がり込みました。このため信玄の城下町である甲府は栄え、多くの商人や職人が集まりました。善光寺も甲府に移され、多くの僧侶、職人、商人も移ってきました。いわば信玄の時代に甲斐はバブルの時代を迎えたのです。このバブルは侵略された者達の涙の上に打ち立てられたものですが、甲斐の住民にはそのようなことが全く目に映りませんでした。ともかく、信玄の時代は甲斐にとって平和で、すこぶる富が増した、甲州人にとっての理想の時代だったのです。

ところが、その子の勝頼の時代、甲斐は織田信長・徳川家康の連合軍の侵略を受け、戦場になりました。信玄の時代とは全く逆に甲斐は略奪の対象にされ、平和が踏みにじられたのです。このため、当然勝頼の評判は悪くなります。

その後『こうようぐんかん甲陽軍鑑』という、信玄万歳史観とも言うべき視点から書かれた軍学の書ができました。この本では信虎は理不尽な暴力親

父、優秀な信玄、不肖の息子勝頼といった構図がとられました。多くの人がこの本の影響を受けて、信玄だけを特別な人、素晴らしい政治家だと理解するようになったのです。

それでは、実際の信玄はどうだったのでしょうか。信玄が行ったことで大事なのは、喧嘩両成敗、私戦の禁止でしょう。これは治安の維持につながります。これを推し進めるためには裁判制度が重要ですが、信玄の時代にはかなりしっかりした裁判がなされたように思います。また、彼は度量衡^{どりょうこう}の統一にも力を入れました。これは流通網の整備につながります。信玄の権力は大きかったので、その領国内では戦争がなく、平和が保たれていました。

●信玄堤

それとともに忘れてならないのが信玄堤です。信玄堤については実態がよくわからないにもかかわらず、大変評価が高いと思います。私個人としては、少し評価が高すぎると考



信玄堤（石積み出し、山梨県南アルプス市）

えますが、逆にそこに甲州人の意識がよく現れています。具体的に確認すると、信玄堤の特質は次のようになるのではないのでしょうか。

- 1 信玄は自己の直轄地でなくとも、流域全体にわたる治水のため号令をかけた。

従来の小さな領主の枠組みを越えて治水を行ったのは、広い範囲を支配した戦国大名の領国支配の特質といえるでしょう。

- 2 戦国大名の登場により広範囲の大規模工事が可能になり、治水の効果も上る。

川の中流域だけで治水工事をして、上流から水害が来たら何にもなりません。治水は川の流域全体を見渡してする必要がありますが、大きな権力を持った戦国大名はそれを行うことができるようになりました。

- 3 戦国時代以前にも甲斐の川には堤防が存在した。

当たり前のことですが、水害常習地に住む人たちは、必ず水害への対処をしていました。甲斐は周囲を高い山に囲まれた盆地で、水害が頻発しました。ですから、信玄が登場する以前から治水の専門家「川除」が存在していました。信玄は彼らを効果的に使用したのでしょう。

- 4 治水の成功は戦国大名の成長度合いと密接につながっていた。

上記のような状況からして、大きな権力、大きな経済力を持っていなければ、大規模な治水はできませんでした。信玄はその最大勢力時に、甲斐・信濃・駿河・遠江の一部・飛騨の一部を領していました。したがって、経済力からしても政権の力からしても、大規模な工事が可能だったはずです。

- 5 治水は経済的・軍事的な利益をもたらし、民衆に信玄を公の

権力として認識させる。

治水とともに新田開発がなされました。戦国時代は食糧難の時代でしたが、それを解決する基本的な方針は、日本国内における新田開発でした。信玄の行為はそれにつながり、領国民に公の権力として認識されたのです。

- 6 治水政策は信濃や駿河でも見られ、信玄の領国支配の方向性を示す。

信玄堤の史料と称するものは、甲斐のみならず、信濃や駿河にも残っていて、信玄の領国支配の方向性を示します。

このように、いくつもの評価が可能なのですが、実態としての信玄堤よりあまりに高く評価しすぎているようです。これは、信玄以降自前の統治者を持たなかった甲州の民衆が、理想の統治者として作り上げた信玄像のように思われます。彼のやったことは、中国の理想の皇帝禹と似たところがあると意識されているようです。信玄以降、次々に甲斐には新たな支配者がやってきましたが、甲州人は信玄公の時代にこうしたことをしてくれた、逆にこうしたことをしてくれなかったら、公の支配者ではないぞと、支配者にメッセージを送り、圧力をかけたのではないのでしょうか。治水などをしてくれた信玄のイメージは、民衆の支配者に対する抵抗の手段になっていたように私は思うのです（笹本正治「武田信玄の治水—統治と王のイメージ」、『平成14年度 第27回関東甲信越地区 知的障害養護学校長研究大会 山梨大会報告書』9～20頁、山梨大会実行委員会、2002年）。

●治水手段としての霞堤

信玄堤の特質は霞堤かすみでいだと言われます。そこで最後に霞堤について触れておきましょう。

霞堤の特質は現在のように完全に堤防を締め切ってしまう、連続堤ではなく、霞が幾重にもたなびくように、堤防を切断させ、そのある部分は二重三重に重ねながら、それを完全



梓川の霞堤（松本市梓川倭）

に締め切ってしまう点にあります。この結果、洪水時には堤防の間から濁流がオーバーフローして、川の水位を低下させますが、洪水が引くと再び水は河川の方に戻ります。また、洪水時に流れてくる養分豊かな土は、周囲に流れこんで田畑を豊かなものにします。現在のような堤防ですと、いったん決壊した水は、川に戻る入口がなく、被害を大きくします。

つまり、霞堤は川を人間がコントロールしようと言うよりも、水と共生する点に大きな特質があります。日本では水を制圧し、人間の支配下に置くよりも、水そのものの動きに合わせて、堤防も造ろうとしたといえるでしょう。

日本の川の特質は国土の7割もが山で、中央部に大きく高い山があり、降った水はすぐ激流となって海へと下ることです。日本の川

を見た外国人が、その流れを滝と表現するのもわかります。しかも温帯に属する日本は降水量が多く、時として台風という大変な雨にも見舞われるのです。こんな地形や降水量からすると、よほどの技術、よほどの経済力がない限り、川や水を完全に制圧することはできませんでした。前近代の日本では、コスト面からしても、技術力からしても、ヨーロッパの河川のように川を封じこめることは無理だったのです。あるいは現代でも、日本では完全に河川を封じこめることができていないわけではありません。

前近代において、治水は地形や降水量、社会のあり方によって、地域によって異なっていました。全世界の治水はすべてが



一様でないはずで

牛伏川のフランス式階段流路工（松本市）

す。ところが、近代日本は欧米をモデルにして、すべてを欧米風の堤防にしようとしてしました。治水技術も同様でした。この結果として現代のような治水手法が採られ、これによって大きな成果を上げているのですが、コストや実際の被害状況などからして、本当にこれだけで良いのかもそろそろ考えていくべき時期に来ているように思います。私は治水の手段を含めて世界がすべてヨーロッパ型でいいのか、大変危惧を覚えます。地域はもっと伝統的な文化を大事にすべき時期に来ていると思います。